

第五期第3卷

この巻は人の脳および臓腑の病を論じており、内傷が多いが、外感にも論及する。要点はすべて《靈樞》《素問》の精微にもとづいて中西の法を深く究明し、さらに数十年の臨床経験を加えている。したがって病を論じた箇所では旧説とは異なるところが多い。

◆ 脳充血の原因および治法を論ず

脳充血とは西洋医学の疾患概念であるが、浅薄な人は中医師がこの疾患を知らないと常々誇る。そうした人は平生《内経》を見たことがないのであろう。《内経》調経論に「血これ氣と、並び上に走れば、則ち大厥を為し、厥すれば則ち暴かに死す。氣反れば則ち生き、反らざるは則ち死す」云々と記載があり、これは西洋医学でいう脳充血の証ではないのか？ 違いは、西洋医学では充血というだけであるが、《内経》では「血これ氣と、並び上に走る」といっていることである。血は必ず氣に随^{したが}って上昇するのは決まりきった道理であるが、西洋医学ではすべて解剖をもとに病を論じるので、脳中に充満する血だけをみて病因を深く追求する助けにすることを知らず、単に脳充血と名付けるのである。《内経》の「氣反れば則ち生き、氣反らざるは則ち死す」は、この証には幸いに転機があり、氣の上行が極まってまた反転下行すれば脳中に充満した血もこれに随って下行するので生きるが、氣が上行して反らずに昇る一方になれば、血もこれに随って充満する一方になって、脳中の血管は破裂にいたって死ぬことを述べる。また《内経》厥論に「巨陽の厥は、則ち首^{こうべ}を腫らし頭重く、足は行く能はず、発し胸（眩）仆を為

す」「陽明の厥は……，面赤くして熱し，妄言して妄見す」「少陽の厥は，則ち暴かに聾し，頬腫れて熱す」とあるが，これらの現象はすべて脳充血証である。秦越人〔扁鵲〕が虢太子の尸厥^{かくたいし しけつ}を治療し，「上に絶陽の絡あり，下に破陰の紐あり」といったのも，脳充血証である。ただし古人の記載は簡潔で，詳しく病因を考究するだけで，治法を仔細に論じていない。しかし，病因がはっきりすれば治法を自製するのは難しくはない。私は平生から数多く本証を治療してきたが，治癒したものは大抵，軽症の脳充血で血管破裂には至っていない。以下に数例をあげて治療の参考に供したい。

奉天で治療した50歳近い高等検察庁科員は，境遇が不運なうえに書類の処理に苦勞し，徐々に頭痛を覚えるようになった。日ごとに激しくなり薬を服用しても効かないので，ついに西洋医の病院で10日治療したが，頭痛は軽減せず逆に目まで痛くなった。さらに数日すると両目がかすんで物が見えなくなり，診察を求めて来院した。脈は左が洪長有力で，「脳が痛むと目に響き，目が痛むと脳に響いて，時に眩暈もあり，言いようがないほど耐え難い」と訴えた。脈と症状から，肝胆の火が気血を挟んで脳に上衝し，脳内の血管がその衝撃を受けて膨脹するために痛み，目は脳につながり脳内血管の膨脹が続くので目が痛んでかすみ眩暈する。そこで，「これは脳充血証である。原因をよく考えると，頭痛が眼痛の根源であり，肝胆の火が気血を挟んで上衝するのが頭痛の根源である。本証の治療は，清火・平肝し血を引いて下行すれば頭痛が癒え，眼痛・かすみ目・眩暈はおのずと容易に治癒する」と説明し，牛膝1両，生白芍・生竜骨・生牡蛎・生代赭石各6錢，玄參・川楝子各4錢，竜胆草3錢，甘草2錢を処方し，磨取鉄銹濃水で煎じ，1剤を服用させると頭と目の痛みが急に軽減し，眩暈はなくなった。方を少し加減してさらに2剤服用させると，頭痛も眼痛もすっかりなくなり，視力も以前よりはっきりしてきた。目がかすむのは外障〔視力障害をきたす表在性眼疾患〕がもともとあるので，外治の方法を同時に行うべきで，磨翳薬水〔生炉甘石1両・硼砂8錢・薄荷葉3錢・蟬退3錢〕を1瓶つくり，毎

日5～6回点眼するとかすみは徐々に消えた。

滄州で治療した50歳過ぎの退役軍人は、軍隊が縦横に移動していた秋に地方で宿泊所の準備をしていて、通過する部隊への応対で過労に陥り、さらに心中に抑鬱もあって頭痛を覚えるようになった。医者が風邪をひいたと考えて、発散薬を投与すると、痛みがいつそう激しくなり昼夜床を転げまわり呻吟し続けた。脈は弦長で左は特に重按有力で、やはり肝胆火盛で気血を挟んで脳に上衝していると知った。発表薬の服用で血がより上奔し、痛みが増悪したのである。処方前方とはほぼ同じであるが、湯薬を服用する前にまず鉄錆1両を煎じた水を飲ませると、まもなく安臥し呻吟しなくなった。ついで湯薬を服用させると、全身に発熱して大量に発汗した。病人の家族は薬が証に合わないのではないかと疑ったが、私は考えてふと理由を悟ったので、病人の家族に「この方と証には実際に齟齬〔食い違い〕があるが、合っていないところはごくわずかである。肝は將軍の官で、中に相火が寄寓するので、急に薬で斂し鎮め瀉しても肝の性質を従順にはできず、内鬱する熱が逆に相火を挟んで反動することがある。原方にさらに1味の薬を加えればこの弊害はなくなる」と言い、茵陳2錢を加えた。服用後すぐに汗が出なくなり、頭痛も大いに軽減した。さらに、原方にやや加減して数剤を連服させると全治した。茵陳は本来止汗薬ではない（後世の本草書では発汗に働くとするものもある）が、方中に加えると汗が出なくなったのは、茵陳が青蒿の若芽であることによる。茵陳は孟春〔陰暦1月〕に採取し、少陽に発生する気を最初に受け、肝胆とは同気相求の妙があり、薬性が涼で肝胆を瀉すというが、じつは肝胆の調和をはかり再び反動させないようにするのである。

滄州で治療した64歳になる建築職人の棟梁は、請負で修理した家で赤字を出し、心中懊惱おのうが甚だしく、10日前に頭痛があったが気にかけていなかった。ある朝起きて仕事場に行くと、急に地面に倒れて昏厥状態になりまもなく意識は戻ったが、左手足が動かず頭痛が非常に激しかった。医者が清火通絡おおうくんしんの剤を投じ、同時に王勳臣〔清代の名医・

おうせいじん
 王清任,《医林改錯》を著す]の補陽還五湯〔生黄耆・当帰・赤芍・地竜・川芎・桃仁・紅花〕の意味で生黄耆数錢を加えたところ,服用後脳中の痛みは錐で刺したように堪え難く,間もなく診察を求めてきた。脈は左が弦長,右は洪長で,いずれも重按すると非常に実である。心中を尋ねると「常に熱感がある」と言う。その家人は「もともと酒好きで,最近は心中懊憹のためにますます焼酎で憂さを晴らし,腹がすくと飯代わりに酒を飲んでいて」と言う。私は「本証は重症の脳充血で,左脈の弦長は懊憹から生じた熱で,右脈の洪長は長期に酒を飲んで生じた熱である。2種類の熱が一緒になり,臓腑の気血を挟んで脳に上衝したのである。脳内の血管が過度の衝撃で破裂すれば,昏厥したまま意識は戻らない。今は幸いに昏厥して間もなく意識が戻ったので,脳内の血管は破裂していないが,管内の血が血管壁から滲出しているか,血管に少し傷が入り少量出血して自然に止まったのであろう」と言った。出血が意識を司る神経部位に顕著ならば昏睡になり,運動を司る神経部位に顕著ならば痿廢になる。本証では,左半身の偏枯〔片麻痺〕であるから,脳内血管の出血で左の運動を司る神経が傷害されたのである。医者は原因を知らずに,あろうことか気虚偏枯の薬を投与したが,この証とこの脈で昇補の黄耆を受け付けるはずがない。このために服薬後に頭痛がますます激しくなったのである。そこでこれまでと同様に処方したが,右脈も洪実なので方中に生石膏1両を加え,やはり鉄錆水で煎じさせた。2剤服用すると頭痛はすっかり消失し,脈は和平になって左手足を自分で動かせるようになった。そこで当帰・代赭石・生白芍・玄参・天門冬各5錢,生黄耆・乳香・没薬各3錢,紅花1錢に改め,数剤連服させると杖をついて歩けるようになった。方中の紅花は脳内の瘀血を化すための配合である。このときには脈がすでに和平で頭痛はなく,温補の黄耆を受け付けるようになったので,方中に少量3錢を用いて正気を補助し,その力を借りて当帰・白芍・乳香・没薬を助け血脈を流通させ,さらに寒涼の玄参・天門冬を温補の黄耆で調べて薬性の寒熱を均衡させて多服できるようにした。

上記の3症例は用薬がほぼ同じで、いずれも牛膝が主薬である。牛膝は上部の血を引いて下行するので、脳充血証にはまたとない妙品である。これは私がしばしば経験して知ったので、あえて医界の諸氏に推薦する。本証の治療に用いる場合は、なかでも懷牛膝が最良である。

◆脳充血証は予防できること、およびその証に誤って中風と名付けた由を論ず

【附】けんれいとう建瓴湯

脳充血証は《内経》でいう厥証で、また後世に中風証と誤称したことは、前に詳しく述べた。しかし、本証を論じるものは「ある日突然発症するので予防は難しい」と言い、病の発症にはすべて予兆があることを知らない。脳充血証は他証と比べて発症の予兆が最も顕著で、さらに数カ月前あるいは数年前にその予兆が現れる。今試みにその発症の予兆をここに詳しく列挙する。

- (1) 脈が必ず弦硬で長であったり、寸盛尺虚であったり、常脈よりも数倍大であって、少しも緩和ではない。
- (2) 頭目によく眩暈がしたり、頭がぼんやりして、健忘しやすかったり、よく痛みを覚え、耳聾目脹がある。
- (3) 胃中に時として気の上逆を自覚し、飲食が痞えて下りなかったり、気が下焦から起こって上行し、しゃっくりになる。
- (4) 心中がよく煩躁したり、心中が時に熱くなったり、睡眠中にさまざまな夢を見る。
- (5) 舌が腫れて言葉が不自由になったり、顔面が麻痺したり、半身がしびれたようになっていたり、動くとき足下がしっかりせず時に眩暈して倒れそうになったり、頭が重く足が軽くて足の裏に綿を踏むような感じがする。

上記に列挙した症状が1つ2つあり、さらに脈象が当てはまれば、脳充血の兆候と判断できる。私は十数年来本証を治癒させたことが非常に多く、斟酌して建瓴湯という処方を選んだ。これを服用すると脳中の血

が建瓴の水〔瓶の水を屋上から覆す意味〕のように下行して、脳充血の証はおのずと癒える。以下にこの方を詳しく記載して医界の採用に備える。

◆^{けんれいとう}建瓴湯

生山薬1両 懷牛膝1両 生代赭石（細かく挽く）8銭 生竜骨（細かく搗く）6銭 生牡蛎（細かく搗く）6銭 生地黄6銭 生白芍4銭 柏子仁4銭

磨取鉄錆濃水〔磨き取った鉄錆の濃水〕でこれを煎じる。方中の代赭石は必ず片面に凸状の点々が、もう片面には凹状の点々があり、生で細かく挽いて用いてはじめて効果がある。大便軟であれば代赭石を去り、建蓮子（芯を去る）3銭を加える。畏涼〔冷え〕があれば、生地黄に代えて熟地黄を用いる。

天津で治療した東門内の友人遲華章の74歳になる母親は、たびたび眩暈があつて頭の中が痛み、心中が煩躁してよく熱感があり、両腕が突っ張って脹れぼたくて動かしにくく、脈は弦硬かつ大なので、脳充血の前兆と判断して建瓴湯で治療した。数劑続けて服用すると諸症状は消失したが、脈象は以前のような大はないが、まだ弦硬であった。薬を飲むのがつらくて服用を中止すると、1カ月余りでにわかにならぬ。そこで、建瓴湯加減を数劑続けると諸症状はまた癒えた。脈象はまだ和平ではないのに、また薬を中止した。1カ月余りするとまた再発したので、やはり同様に建瓴湯加減30余劑を続けて服用させた。脈象が和平になったところで、服用をやめさせると、やはり再発しなかった。

天津河北で治療した50歳を過ぎた王姓の男は、頭が痛み顔面に麻痺を生じ、西洋医の病院を受診した。西洋医は血圧を測り160mmHg以上あるので脳充血証と診断した。薬を何日服用しても効かないので、私に治療を求めてきた。脈は弦硬で大なので、確実に脳充血と知り、建瓴湯の代赭石を1両に変えて10余劑連服させると、頭がすっきりし口眼歪

斜〔顔面神経麻痺〕も消失したが、脈はまだ正常には回復しなかった。再び西洋医の病院に行き計測すると、以前に比べ20数mmHg低いはまだ正常ではないといわれた。その後、私に会いにきてこのことを述べたので、「まだかなりの期間服用すべきで、脈象が和平にならなければ服用をやめてはいけない」と勧告したが、彼は治癒したと感じていて意に介さなかった。それから4カ月間服薬しようと思わず、その後仕事が見つかって家を離れた。数10日間あくせく働いてやっと帰ってきたが、また立て続けにマージャンをしたところ、ある朝急にふらついて倒れそのまま死亡した。この2症例をみると、この方を用いて脳充血証を治療する場合は、必ず脈象が和平になりまったく弦硬がなくなるまで服用をやめてはならないことがわかる。

らんしゅう灤州〔河北省にある〕の友人・朱鉢文は博学高尚な男で、職業医師ではないがじつは医学にも詳しく、かつて私に「脳充血証は、引血下行薬中に破血の薬を加えて治療すべきである」と話し、私はこれを聞いて啓発された。眼疾患で痛みが頭に放散するものは、脳充血に原因することが多く、眼科医がよく大黄で熱を瀉すと頭も目も痛くなくなるのはこれにほかならず、大黄で脳充血が消失するためである。大黄は降血に破血の力を兼ねた最も有力な薬ではないか。そこで、脳充血証で身体・脈象が壮実ならば、最初に建瓴湯を1～2剤服用するときに大黄数錢を適宜加えるべきで、身体・脈象があまり壮実でなければ、桃仁・丹参などを建瓴湯中に適宜加えるとよい。

唐宋以来、この証を中風と名付けたのにもいわれがないわけではない。日常の臨床経験から、脳充血証では常に病根が内に伏在しており、ついで風邪が外表を束して〔ひきしめる〕内に燥熱が生じ、ついにその病根を激動してある日急に発症することに気づいた。そこで私は本証の治療では、外感の熱を挟雑していれば、よく建瓴湯中に生石膏1両を加え、2～3日後に陽明大熱が現れて脈が洪実を呈すれば、まず白虎湯あるいは白虎加人参湯で外感の熱を清し、その後に脳充血証を治療する。これは私の日常の経験から得たことで、唐宋以来の医家の過ちを隠すわ

けではない。これらの証を突き詰めると、中風と脳充血を兼ねることはあり得るが、中風とのみ称することはできない。劉河間〔金元四大家の一人で「主火論」を唱える〕が現れると、本証は外襲の風ではなく内生の風であり、実際には五志過極により火が動じ、突然^{あた}中ると論じた。大法は、白虎湯・三黄湯^{そそ}で沃いで実火を治し、逍遙散^{とお}で疏して鬱火を治し〔逍遙散中の柴胡は血を引いて上行させるので最も忌用で、鎮肝熄風湯中では茵蔯・麦芽の諸薬を用いて疏肝するに止める〕、通聖散〔方中の防風も用いるべきではない〕・涼膈散〔《和剂局方》連翹・山梔子・薄荷葉・黄芩・甘草・朴硝〕で双解し表裏の邪火を治し、六味湯で滋し、水の主^{きか}を壮んにし以て陽光を制し、八味丸で引き、いわゆる従治の法で引火帰源〔引火帰源の場合も、桂枝・附子は決して用いてはならない〕し、また地黄飲子〔熟地黄・巴戟天・山茱萸・石斛・肉苁蓉・炮附子・五味子・肉桂・茯苓・麦門冬・菖蒲・遠志〕で言語障害・下肢麻痺を治すと論じた。これらの議論は、従来の脳充血を中風と誤認していたものよりまともであるように思える。脳充血証の発端は肝気・肝火の妄動によることが多く、肝は木に属し風を生じるので、これを内中風と名付けるのは理に適っている。しかし、《内経》の「血これ気と並びて上に走る」の主旨をまだ理解していないので、用いた処方はずっと病証に適合してはいない。方中に記載された防風・柴胡・桂枝・附子などは、本証には最も禁忌である。

また、《金匱要略》には風引湯があり、熱癰^{ねつたんかん}を除く。癰癩は熱が付いた病名であるからには、病が熱によることは明らかで、その証はもとも脳充血に似る。方には6種類の石薬を用い多くは寒涼の品で、辛熱の乾姜・桂枝の配合はあるが、大黄・石膏・寒水石・滑石と併用するので混合すると薬性はやはり涼である（細かくいえば桂枝・乾姜は用いるべきではない）。さらに、諸石の薬性はすべて下沈し、大黄の薬性は最も下降であるから、本来逆上した血を引いて下行させる。また、竜骨・牡蛎と紫石英を同用すると衝気^{おさ}を斂め、桂枝と同用すると肝気を平定する。肝気・衝気が上干しなければ、上に充満する血はおのずと徐々に下

降する。また、方を風引と名付けてはいるが、祛風薬を用いてはいないので熱癱瘓が中風でないことは明らかである。後世には方中の意味がわからないために、方を誤解しているものが多い。私が創製した建瓴湯は、代赭石・竜骨・牡蛎を大量に用い、さらに石膏を加えることもあり、じつはひそかに風引湯の方意を手本にしている（風引湯方の下文は非常に簡潔で、仲景の文章ではないようである。そこで方書の多くは、これは後世の加筆であるから方中の薬は完璧ではないと疑っている）。

◆ 脳貧血治法を論ず

【附】脳髓空治法

脳貧血は脳中の血液不足で、脳充血とは正反対である。常に頭重・目眩があつて意識がぼんやりし、顔色が黄色く口唇が白かったり、息切れがしたり、心中怔忡〔動悸、^{せいちゆう}落ち着かず不安感を伴うことが多い〕があつたり、頭目が時に痛むが、脳充血の脹った痛みとは異なり、締め付けられるような感じに似た痛みである。激しいときには急に昏倒し^{したいたいはい}肢体頹廢〔四肢麻痺〕あるいは偏枯〔半身不随〕になることがある。脈象は微弱で、至数が遅のこともある。西洋医学では脳中の血が少なく中枢神経を栄養できないために知覚・運動機能を司れないと説明するが、この証は補血薬だけでは決して治癒しない。《内経》〔《靈枢》口問篇〕には「上気足らざれば、脳これがために満たず」とあり、この文は脳貧血の原因を解明するとともに脳貧血の治法をも明らかにしている。血は心から生じて脳に上輸される〔心には脳に通じる4つの血管がある〕が、血は自力では脳に輸送されない。《内経》〔《靈枢》邪客篇〕で論じる宗気は、「宗気は胸中に積し……以て心脈を貫きて、呼吸を行らす」とあることから、胸中の宗気は呼吸の中枢であるだけでなく、心から脳への輸送を行う血脈に対しても宗気が中枢であるとわかる。《内経》の2カ所の文を参考にすると、「上気」とは宗気上昇の気であり、「上気足らざれば、脳これがために満たず」とは、宗気于心脈を貫いてその上昇を助けられず脳中の気血が不足することだとわかる。しかし、血は有形、気

は無形であり、西洋医学では病気を実験から理解しようとするので、血をいうが気をいうことはない。したがって脳貧血の治法は、当然血を滋補すべきではあるが、胸中の宗気を峻補して血が上行するように助けることが肝要である。これをもとに古方を考えると、大量の黄耆で補気し少量の当帰で補血する補血湯〔当帰補血湯〕は脳貧血の治療に適切な方剤である。以下にその方を記載し、同時に証によって加えるべき薬物を詳論する。

◆ 補血湯

生黄耆1両 当帰3銭

短気〔息切れ〕があれば柴胡・桔梗各2銭を加える。温補を受け付けなければ生地黄・玄参各4銭を加える。もともと寒涼を畏れる場合は、熟地黄6銭・乾姜3銭を加える。胸に寒飲があれば乾姜3銭・陳皮2銭を加える。

■ 按：《内経》の「上気足らざれば、脳これがために満たず」は、理論によって想像しただけのものではなく、^{しんもん} 凶門〔大泉門〕未閉鎖の小児で実証することもできる。《靈枢》五味篇には「大気は胸中に搏し、穀気に頼り以てこれを養い、穀入らざること半日なれば則ち気衰え、一日なれば則ち気少なし」とある。大気とは宗気である（理由は大気詮中に詳しい）。小児慢驚風証をみると、脾胃虚寒で飲食を消化吸収できないために宗気が衰えることがわかり、さらに頻回の吐瀉により虚が極まって風が動じ、宗気が血を上昇させて脳に灌注するのを助けられなくなることもわかる。そこで、小児が慢驚風にかかると必ず凶門が陥凹する。これこそ「上気足らざれば、脳これがために満たず」の明確な証拠ではなかろうか？ 時の賢人である王勉能氏は「小児の慢驚風証では、脾胃虚寒のために気血が脳中に上朝できず貧血をきたすだけでなく、寒飲が胸を填塞し陰寒の気が脳に上衝して中枢神経を激動するので、癩瘕〔癩